

比文創立十周年記念文集

<https://doi.org/10.15017/18001>

出版情報：2004-02. 九州大学大学院比較社会文化学府・研究院
バージョン：
権利関係：

あとがき

一九九四年三月に教養部制度が廃止されました。振り返れば、それは今に至る大学改造の大きな一里塚であったようです。六本松でこの大学の一般教養教育を担う主体であった教養部はそれまでの「分校」を継承して一九六三年四月に発足したものです。六本松独自のリベラリズムを謳歌していた教養部教官は新学部構想が頓挫するなか、「独立大学院」創設に向ったのでした。その結果が「比較社会文化研究科」という長い名称の大学院誕生でした。予算の成立が延びて、これは一九九四年六月にようやく発足する運びとなりました。その後、九州大学は大学院重点化を果たすとともに、二〇〇〇年四月には学府・研究院制度をつくり、比文もそれらに従って編成替えされることになりました。この文集に収録された文章は教養部解体・比文創設に関わる時点から学府・研究院制度への移行を挟んで今日に至るまで色々な側面について触れています。国立大学は二〇〇四年四月からは独立行政法人になりますから、この文集に書き残された事柄は国立大学としての最後の姿を映すものです。こうした大学大変革に立ち会えたことを幸いと思うか、不幸とみなすか、大いに見解は分かれるところでありましょう。

大学院の名前が長いので、どう略称するか。この難問？にたいして初代院長志垣嘉夫先生は、それは「比文」であると言われました。それにたいして、「ヒブン」は「碑文」ではないかとか、「社」が落ちてしまふのではないか、「比社文」が正しいという正統派？もいました。いや、そんなことならば、「比研」のほうがよい、などなど、しばらくやり取りがあつたのですが、どうやら、「比文」に落ち着きました（今や学内の「正式な」呼称にもなっています）。それでも、「比研」という人がまだかなりいるようです。

このような文集に改めて「何かを書く」ことはなかなか取り付きにくく、やり難いことだと思いません。普通の論文を書くほうがとても「楽である」といった感想を抱きながら、エッセイを執筆していた方も多かつたようです。無論、様々な理由からこの文集に参加を取りやめにした（せざるを得なかつた）人も沢山います（第二代院長 有馬學先生は体調がすぐれず執筆を辞退されました）。ここに文集が刊行できることにたいして、書かなかつた（書けなかつた）方も含めて、すべての関係者に深く感謝します。有難うございました。

なお、編集にあたっては、高橋憲一、清水展両評議員はじめ職員の方々の協力をえました。提出された原稿は極力、尊重して、最低限の技術的な補正を加えるにとどめました。（高田）